

『天から下ってきたパン』③ (ヨハネの福音書 6章 51-65節) 2020.10.18.  
<はじめに>「わたしの与えるパンは…わたしの肉です」(51)のイエスのことばに、ユダヤ人たちは更にざわつきます(52)。相手の話がよくわからない、納得いかない場合どうしますか。言葉尻を捕らえる論争に入りますか。相手との関係を見直しますか。他に取れる対応は何かありますか。

## I イエスにつまづく

### ① 絞られる聴衆

「これが…会堂で話されたこと」(59)とあります。どこでイエスは会堂に入られたのでしょうか。最初はカペナウムまで追って来た群衆に、やがてユダヤ人たちに、60節以降は弟子たちにイエスは話されています。聴衆が入れ替わったのではなく、絞られて行ったのです。

### ② 聞くに堪えない話(60-61)

弟子の多くが「ひどい話」とイエスの語られることに嫌悪感をあらわにします。モーセの律法に厳に禁じられている「血を飲む」こと(レビ記 7:26-27, 17:10-14 等)をイエスが要求したからです。イエスに信頼し、期待してついて来た弟子の多くが文句を言い出しました。

### ③ つまづくのは(61-65)

イエスのことばを文字通り現実的に捉えた故に、彼らはつまづきました。彼らはイエスよりも自分が正しいと思ったからです。これは今でも起こり得ることです。父なる神は今も人に働き掛けておられ(65)、その価値観が覆されると、その人はどうするのでしょうか(62)。

## II わたしの肉、わたしの血(53-58)

### ① 霊・いのちのことば(63)

「どうやって自分の肉を与えて食べさせるのか」(52)に対して、イエスは本気で答えます。53-56節に繰り返される「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む」には、天から下って来たイエスが行う父のみこころ(38)が表されています。これがイエスの食物です(ヨハ 4:34)。

### ② まことの食べ物・飲み物

肉と血からユダヤ人ならいけにえを連想できます。これはやがて現れる救い主の予表です。彼はすべての人の罪を負って、自分のいのちを代償のささげ物として差し出す、と預言されていますが、ユダヤ人はそれに思い至りません(イザヤ 53:4-6,10)。

### ③ わたしを食べる者

ここでイエスは、自らが進まれる十字架を暗に語られるとともに、この贖いの御業に与る者に永遠のいのちが与えられ(54)、キリストとの交わりの内に生きること(55,56)を約束されます。主を信じて聖餐に与る者にも、等しくこの約束は有効です。

## III 弟子の道

### ① 聖餐に与る

聖餐式において、イエスの肉と血を魔術的に食するものではありません。イエスの死によって提供されている罪の贖いと生まれ変わり、永遠のいのちを、新たに受け取ります。そして、主の弟子としてイエスの足跡に倣って生きる(1ペテロ 2:21)決意を新たにします。

### ② 十字架を負う

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい」(ルカ 9:23)。主の弟子となる者にも、自分が負うべき十字架があります。従い行く者の前には主イエスの足跡があり、慰めと励まし、希望を汲み出せます。

### ③ 日々弟子として生きる

師にあこがれ、尊敬と期待をもって弟子となる者はそれなりにいます。しかし、66節には弟子の多くがイエスから離れ、共に歩もうとはしなくなったのは何故でしょうか。主の弟子とは立場・ポジションではなく、日々主を信頼し、主との関係を保つ者です。

<おわりに> 食することを用いて、主イエスはご自分と弟子たちとの関係を表されました。イエスが成し遂げてくださった十字架の贖いの恵みを日々仰ぎ受け取り、また主が分かち与えられる自分用の十字架さえも主とともに担い進み行くのが、主の弟子です。(H.M.)